

氏 名 池谷 和信

学位(専攻分野) 博士(文学)

学 位 記 番 号 総研大乙第 280 号

学位授与の日付 2023 年 9 月 28 日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学 位 論 文 題 目 Sedentarization and Lifeway Choices of the Botswana San: Mobility and Subsistence (1929-2010)

論文審査委員 主 査 鈴木 英明
人類文化研究コース 准教授
信田 敏宏
人類文化研究コース 教授
岸上 伸啓
人類文化研究コース 教授
今村 薫
名古屋学院大学 現代社会学部 教授
寺嶋 秀明
神戸学院大学 名誉教授

博士論文の要旨

氏 名：池谷和信

論文題目： **Sedentarization and Lifeway Choices of the Botswana San: Mobility and Subsistence (1929-2010)**

定住化は、人類の歴史のなかで生活様式を変える革新的な出来事であった。旧石器時代に西アジアで人類による最初の定住化が行われて定住狩猟採集民が誕生したあとに、農耕や家畜飼養が開始されたといわれる。これまで民族学では、近現代におけるイヌイット、オランアスリ、アエタ、ムラブリ、サンなどの遊動狩猟採集民を対象にした民族誌が、定住化研究への貢献をしてきた。具体的には、定住化の過程、集落パターン、狩猟採集と漁撈を組み合わせた生業複合、獲物の分配からみた社会関係など、これらの維持と変容が明らかにされた。

しかしながら従来の研究では、定住化後の集団が調査対象として選ばれることが多く、定住前の世帯の移動や生業複合の様態が十分に明らかにされていない。また生業では、狩猟採集のみならず農耕や家畜飼養に焦点を当てた研究がほとんどみられない状況にある。

この結果、遊動から定住への多様な過程、定住化による生業複合の変化が十分に把握されていない。

本論文では、南部アフリカのカラハリ砂漠に暮らす狩猟採集民サンを事例にして、1929 年から 2010 年までの約 80 年間におけるサンの定住化の過程とそれともなう社会変容を、人の移動と生業複合の側面から把握することが目的である。筆者は、ボツワナ中部の中央カラハリ動物保護区（以下、リザーブと呼ぶ）の内外でサンが暮らす 3 つの集落（モラポ、カデ、ニューカデ）を主な対象にして生態人類学的調査を実施してきた。具体的には、通算で 2 年間の滞在のなかで各種の狩猟活動に参加しながらおこなった調査と 1987 年から 2010 年までの 23 年間にわたる定点調査である。なかでも遊動時代の移動は、古老からの聞き書きによって、新たに対象地の地名を収集して出生や婚姻など、各世帯の出来事が起こった場所をおさえることにより、数十年間における世帯の移動の動向を把握した。これらの結果は、以下の 3 つの時代に分けてまとめられる。

1) 1929—1970 年（「遊動キャンプと半定住集落との共存の時代」）

遊動生活の実際：これまで明瞭にされてこなかった遊動民サンの居住地移動を対象にして、地名と出来事を使用しての古老からの聞き書き調査によって、1930 年、50 年、60 年の同一グループにおけるそれぞれの遊動域が復元された。1930 年代のサンでは、1 年の間、一つのキャンプの領域内において遊動生活が行われていた。しかし、数十年単位でみると井戸の水を求めて長距離移動をするなど、通年の遊動域内でおさまらない移動になっていたことを明らかにした。

生業複合：この時代の生業では、狩猟のなかで弓矢猟や犬猟のほかに罟猟が盛んになっている。また、サンはカラハリ農牧民にキツネやジャッカルの毛皮を提供する代わりに彼らからタバコや犬などを入手しているなど、サンとカラハリ農牧民の社会経済関係が維持されていた。1950 年頃は天然痘の流行によって数多くのサンが死亡した。この頃には、オランダ系移民の牛牧場にて家族で移動して働くサンの集団もみられた。

2) 1980-1996 年 (「定住集落と半定住集落との共存の時代」)

定住化の過程：ボツワナ政府の近代化政策によってリザーブ内に井戸やクリニックがつくられ、特定の集落への定住化がおしすすめられ遊動キャンプから定住集落への移行が進行した。しかし定住化の過程は、井戸が設置されているカデ集落と井戸のない半定住集落のモラポでは異なっていた。

生業複合：カデ集落に注目すると、狩猟採集、ヤギ飼養、農耕、民芸品生産、道路工事への従事など生業複合がみられた。狩猟では、弓矢猟に変わって騎馬猟や犬の助けを借りる槍猟が盛んになった。農耕牧畜では、ヤギの所有頭数に世帯間の違いがみられ、ほかの集落の居住者とのあいだにヤギの委託関係が認められた。スイカや豆類を栽培する農耕は一部の人が行ったが、栽培スイカの場合には収穫量の多い年に世帯を超えての収穫物の分配がみられた。

3) 1997-2010 年 (「村落と半定住集落との共存の時代」)

定住化の過程：ボツワナ政府による 1997 年の集住化政策によって、カデほかの定住集落からリザーブの外のニューカデ村など他の村への移動が進行した。ニューカデ村は、個々の家屋の配置と区画が決められた住宅地が中心になっていた。また、リザーブ内では住人が移動して廃村になった集落とその他の集落とに分かれた。ただし、ニューカデ村に移動した住人のなかには、のちに元の集落にもどった人がいる点が注目される。

生業複合：この時代の生業では、狩猟採集が衰退して農耕や家畜飼育が盛んになった。とくにウシ飼育に依存する人が生まれる一方で家畜をまったく保持しない世帯が存在する。また、政府からニューカデ村の住人に配給された食料は、親族関係などをとおしてリザーブ内の集落の住民にも配分されていたことが明らかになった。これは、リザーブの内外の地域へのサンとカラハリ農牧民の連合体としての新たな対応を示す。

以上のことから、ボツワナ中部のサンは過去 80 年のあいだ時代に、「遊動キャンプ」、「半定住集落」(モラポ)、「定住集落」(カデ)、そして「村落」(ニューカデ)という 4 つの異なる形の集落での生活をしてきた。とりわけ定住集落のサンは、定住化以前より農耕や家畜飼養に従事するのみならず商業狩猟を展開してきた。これらの背景には、サンが、リザーブ内の複数の半定住集落との社会的ネットワークを持ちながらも、世帯ごとに異なる暮らしを選択してきたことがみられる。具体的には、リザーブ内のサンの場合、リザーブ内のキャンプから土地利用権のある定住集落、そして土地所有権のある村落へ移動した人がいる一方で、村落から半定住集落にもどる人もいた。

また、サンの貯蔵と分配の問題を考える際に、貯蔵するものが野生スイカや狩猟により獲得した動物の肉の場合には、それがたとえ交易用に使われるものであっても、平等主義による分配が集団内で機能する。しかし、彼らの所有物がヤギの場合には類似の傾向が多少は認められるものの完全に平等主義による分配というわけでない場合もあり、さらに大型家畜のウシがサンの社会に導入されると、ヤギ以上に個人による所有が明確になり分配の機能が働きづらくなっていた。

このようなことから、過去 80 年におけるサンの移動と生業複合の変化をみると、各時代のサンのなかで多様な居住地選択が生じており、遊動キャンプから半定住集落が定住集落、そして村落に移動する世帯が多いものの「半定住の生活様式」が一部で維持されていた点は注目される。このことは、政府の開発政策が進むなかで、多様な生業を組み合わせる「半定住の生活様式」は様々なリスクに柔軟に対応できる形であることを示している。

Results of the doctoral thesis defense

博士論文審査結果

Name in Full
氏 名 池谷和信

T i t l e
論文題目 *Sedentarization and Lifeway Choices of the Botswana San
: Mobility and Subsistence (1929-2010)*

申請者の池谷和信氏（以下、池谷氏）によって提出された本論文は、南部アフリカのカラハリ砂漠におけるサンの定住化と生活様式の選択の実態を、1929 年から 2010 年までの 80 年超に亘る期間を対象に移動と生業に着目して解明したものである。考察にあたっては、1987 年から 2010 年までに通算 20 か月に亘ってボツワナ中部の中央カラハリ動物保護区内外の 3 つの集落（モラポ、カデ、ニューカデ）を中心に池谷氏が実施した生態人類学的参与観察とボツワナ国立文書館における約 2 か月の文献調査に主として依拠している。

池谷氏によれば、1950 年代以降に勃興したサン研究は、とりわけ遊動サンの定住化への関心が薄く、また、特に生態人類学の築いてきた人類の原初的な姿としてのサン像に対して歴史学・考古学がその再考を促したことに端を発し、狩猟採集民研究全体にも影響を及ぼした 1980 年代に始まるカラハリ論争以降、特に生態人類学の側からの歴史軸を含んだ考察が希求されてきた。本論文はそのような研究状況を踏まえ、遊動サンの定住化について 20 世紀前半からの 80 年超に亘る期間を対象にして、定住化と生活様式選択とを描いた歴史民族誌と呼びうる内容になっている。

より具体的にその内容を説明すると以下のとおりである。本論文は序章と実質的な考察のまとめである第 8 章、そして終章を含む全 9 章から構成されており、サンの定住化と生活選択の変化を捉えた 3 つの時代区分に沿って議論が進められている。その時代区分とは、①1929 年から 1970 年までの「遊動キャンプと半定住集落との共存の時代」（第 2－3 章）、②1970 年から 1996 年までの「定住集落と半定住集落との共存の時代」（第 3－6 章）、③1997 年から 2010 年までの「村落と半定住集落との共存の時代」（第 7 章）となる。それぞれについては、以下に言及する 3 つの異なる生態学的方法から接近が試みられている。

歴史生態学 *historical ecology* 的な接近方法から論じられる①では、古老からの聞き取りや文書館調査によって得られた地名などの情報を手掛かりに、サンの生業の変化と移動の実態解明に努めている。特に 1950 年代以前のサンに関するこれらの実態はこれまで明らかにされてこなかったもので、その試みの価値は高い。とりわけ、文書館資料から毛皮の輸出の実態を明らかにし、古老からの聞き取りにより狩猟の状況を復元し、双方を連関させた点は、狩猟から輸出、ローカルからグローバルへの連続性が読み取れるだけでなく、文献と聞き取りを有機的に連関させるという方法論的にも学術的価値は非常に高い。

②はボツワナ政府が 1970 年代前半から本格化させたサンの定住化の試みとそれに伴うサンの生活変化が文化生態学 *cultural ecology* 的手法によって論じられる。政府による定住化の試みとは、具体的には集落に給水用井戸や小学校、診療所などを設け、井戸を持た

ない集落には給水車が定期的に巡回するなどといったものである。これによって、サンは狩猟採集のほかに、小規模ではあるがスイカ栽培などの農耕やヤギ飼養、民芸品制作をするようになった。ここで池谷氏がとりわけ着目するのは、井戸を持たない集落であり、ここでの生活様式を「半定住 semi-sedentarism」と呼ぶ。池谷氏は、この生活様式について、農耕やヤギ飼養が定期的な給水車の巡回によって可能になる一方、井戸がないので特定の土地に束縛されず、好きな場所に移動して狩猟採集できるという点を強調する。

③では、政府主導によるサンの再移住計画が実行され、従来の居住地である中央カラハリ動物保護区外にある居住地ニューカデで生じたサンの生態や人間関係の持続と変化が政治生態学 *political ecology* 的手法で論じられている。すなわち、ニューカデへの移住にあたってボツワナ政府は居住地を与えるとともに、現金や家畜の供与などの移住に対する補償をサンに与えた。これに応じる人々も少なくなかったものの、従来の居住関係を無視した居住地割り当てがなされるなど計画には大きな欠陥も存在し、移住開始後、数年も経たないうちに中央カラハリ動物保護区に戻る者も現れた。ここからは政府主導の定住化政策が強力な補償を付帯するにもかかわらず、誰にも受け入れられるものではないことが明らかとなる。また、移住者が補償として獲得した物品が、移住地からの離脱者にも流れているなど、政府の定住化政策やそれを巡る個々の対応は一見すると、旧来の人間関係を断絶に向かわせるように思わせるが、実際には、旧来からの人間関係が持続していることも明らかにされた。

第 8 章から第 9 章にかかる結論部では、これらの 3 つの時期区分を整理して示しつつ、次の点が強調される。まず、サンが考察対象時期において遊動キャンプから村落に至るまで多様な居住地選択を行い、また、居住地選択の多様化に伴い狩猟のみでなく、農耕や家畜飼養といった生業の選択肢も増えていき、そこに異なる生業を複合させることで多様な生活様式が見られたことである。このように居住地や生活様式の多様化が顕著な一方で、親族関係等の旧来の人間関係は必ずしも崩壊するのではなく、たとえば、村落成員と半定住集落成員とのあいだでは、狩猟によって獲得した肉や収穫量の多い年の栽培スイカなどを対象に、分配の関係が保たれていた。また、居住地選択は遊動から半定住、そして定住へという一方向的なものではなく、村落から半定住集落に戻る事例が見られるなど、個々の置かれる状況によって多様なパターンが生じた。そのなかで、半定住は狩猟採集を継続させつつ、そこで生じうる様々なリスクに政府の開発政策をある程度受け入れることで柔軟に対処し得る居住形態として注目すべきであると申請者は主張し、結論が閉じられる。

本論文は多様な見地から評価されるべき内容になっている。まず、本論文内で披露されたデータは長期間に亘り、かつ複数の地点で収集され、かつ、移動距離や住環境などその収集は大変に労力を要するものである。かつ、本論文の対象時期におけるカラハリ砂漠は植民地から脱植民地への移行、大規模資本の鉱山開発などに代表されるグローバル化の進展など、大きな変動を経験した。そのような時期に収集された民族誌的データであるという点も踏まえれば、その学術的価値は一層高く評価されよう。たとえば、アフリカ史研究では、文字資料を自ら残さない人々について、彼らの主体性を掘り上げながら、その過去を明らかにすることが、この分野の成立の段階から大きな課題としてあり続けている。口頭伝承や遺物の活用はその一端である。本論文は、それらに加えて、持続的な長期参与観察がサンの歩みに接近する大きな可能性を示した研究として高く評価される。また、狩猟

採集民研究の立場からは、サンの犬や馬を利用した狩猟、ヤギの飼養について詳細に扱った研究はこれまでに少なく、それらが豊富なデータとともに論じられている点が評価される。また、ボツワナ・サン研究の立場からは次の指摘もある。すなわち、従来のボツワナ・サン研究のほとんどは定住村での調査や資料収集に基づいてきたが、本論文は半定住村における調査や資料収集にも基づくことで、遊動生活から定住生活へのモデルを考察した点が評価できるというものである。また、同様に、彼らの狩猟採集生活がイギリス本国からツワナ系首長国へと上から下に連続するイギリス帝国内秩序と無関係ではないことが明らかになった点は、これまでのサン研究で歴史的考察が手薄だったことに鑑みれば評価に値するだろう。

とはいえ、課題も少なくない。たとえば、モラル・エコノミーやバンドなどの専門用語、加えて、本論文で重要な概念となる **settlement** と **village**、**sedentarism**、**semi-sedentarism** の定義が必ずしも十分ではない。また、歴史生態学、文化生態学、政治生態学という3つの方法についても、それらが有機的に連関して定住化の過程の解明に成功しているとはいえない。また、序章では人類史規模の枠組みでの議論が展開されていることに鑑みれば、本論で、たとえば分配や国家の定住化政策などについてイヌイトとの比較などを行うことも可能であったはずだが、こうした試みはなされず、いわばサン研究に没頭する内容となっている。これについては、申請者のこれまでの業績に鑑みれば、序章の枠組みをより十全に活かす論じ方もあったはずであり、この点は複数の委員から指摘があった。ただし、最後に挙げた課題はむしろ、今後の申請者の研究活動に期待されることがらであろう。また、それ以外の課題も本論文が提供する重厚なデータと新たな発見、そこから導き出される新たな学術的知見の優れた価値を台無しにするものではない。

以上を総合的に検討した結果、審査委員会は全会一致で、本論文が博士の学位を授与されるに値すると判断した。